

積極的に地域・調査研究会に参加していただければと思います。また報告希望者も歓迎しておりますので、その際は事務局までお声をかけていただければ幸いです。

「社会政治研究会について」

名古屋大学大学院環境学研究科社会学講座准教授
上村泰裕

社会政治研究会は、大岡頼光（中京大学）、上村泰裕（名古屋大学）、田村哲樹（名古屋大学）、山岸敬和（南山大学）によって2009年に設立された。その経緯については上村（2011）に詳しく、また、第1回研究会の様子は中根（2009）によって紹介されている。その後の展開を一言で要約するのは難しいので、以下に各回のプログラムを掲げる。報告者の専攻分野を大まかに分類すれば、社会学と政治学が11名ずつ、経済学が6名となっている。毎回多彩な議論が展開され、美酒に酔いつつ知的交流を深める幸福を味わっている。本研究会が学問の垣根を越えた交歓と触発の機会であり続けることを願う。

- 第1回 2009年5月7日（参加者37名）田村哲樹（名古屋大学）「ベーシック・インカム、自律、政治的実行可能性」／大岡頼光（中京大学）「死生観と老人介護」
- 第2回 2009年11月26日（参加者20名）西山真司（名古屋大学）「信頼論の展開と転回」／渡邊幸良（同朋大学）「職業と子育て環境」
- 第3回 2010年5月7日（参加者19名）江里口拓（愛知県立大学）「ウェップ夫妻の福祉国家論とその周辺をめぐる」／大井由紀（南山大学）「グローバリゼーション下における越境と境界線」
- 第4回 2010年11月26日（参加者13名）柴田悠（日本学術振興会）「再分配の社会学の試み」／菊池理夫（南山大学）「サンデルの「共通善の政治学」」
- 第5回 2011年5月20日（参加者16名）山岸敬和（南山大学）「戦争と日米の医療保険」／福澤直樹（名古屋大学）「ドイツ疾病保険の生成と展開」
- 第6回 2011年11月24日（参加者18名）山田壮志郎（日本福祉大学）「貧困ビジネスの現状と社会福祉政策の課題」／伊藤恭彦（名古屋市立大学）「世界の貧困問題と富裕国の責任」
- 第7回 2012年5月11日（参加者28名）藤田菜々子（名古屋市立大学）「ミュルダール福祉世界論の現代的意義」／加藤雅俊（立命館大学）「福祉国家再編の日豪比較」
- 第8回 2012年11月22日（参加者14名）大岡頼光（中京大学）「高等教育費の公的負担はどうすべきか」／辻由希（立命館大学）「家族主義福祉レジームと女性労働」
- 第9回 2013年5月17日（参加者12名）加野泉（名古屋大学）「就学前教育政策における

る「包摂」概念」／相澤真一（中京大学）「高校教育機会の提供構造の全国的成立とそのゆくえ」

第10回 2013年11月21日（参加者22名）寺尾範野（名古屋外国語大学）「イギリスにおける社会学と福祉国家思想の交錯」／生源寺真一（名古屋大学）「変わる農業、変わらぬ農業」

第11回 2014年5月15日（参加者22名）川島佑介（名古屋大学）「中央政府の選択、地方自治体の選択」／田村哲樹（名古屋大学）「熟議・参加・自由民主主義」

第12回 2014年10月31日（参加者18名）大岡頼光（中京大学）"Sweden's Welfare and Education Budget System"／Sven E. O. Hort（ソウル大学）"From the First to the New Asian Welfare States"

第13回 2015年5月21日（参加者26名）荒見玲子（名古屋大学）「要介護認定が市民に付与する政治的効果」／小峯敦（龍谷大学）"Keynes and Women's Degree in 1920/21"

第14回 2015年11月20日（参加者21名）吉野裕介（中京大学）「これからの「リベラル」を定位する」／筒井淳也（立命館大学）「リベラリズムと親密性の正当化」

文献

上村泰裕, 2011, 「社会政治研究会について」『東海社会学会年報』第3号.

中根多恵, 2009, 「社会政治研究会」『名古屋大学社会学会会報』第10号.

不老会研究会

名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程

王 昊凡（おう こうはん）

不老会は、社会学講座の先輩方から受け継がれた院生の研究会である。筆者が知る限りこれまで、社会理論に関する読書会や新古典の「再訪」、方法論研究会など様々なテーマが掲げられてきた。

今年度の不老会は、院生の研究報告会と読書会を平行して行うこととなっている。11月末現在までに四回の研究会を行っており、年度じゅうに少なくともあと二回開催される予定である。以下、既に行われた四回の概要について記しておく。

第一回目（4月29日開催）は学術振興会特別研究員申請者による報告が行われた。第二回目（5月31日開催）では博士前期課程1年を中心に、名古屋大学社会学講座に提出された修士論文の輪読を行った。筆者自身も経験したことだが、博士前期課程では2年（実質でいえば更に短く、おおよそ1.5年くらい）で修士論文を書かなければならず、時間的には余裕があるわけでは決していない。ゆえに早い段階で先輩方の修士論文を読むことで、在籍